研究ノート

カザフスタン・オトラル出土ジョチ朝貨幣

On a Silver Coin of the Juchids(the Golden Horde) Found at Otrar, Kazakhstan

安　木　新一郎
YASUKI Shinichiro

抄録
　中央アジアのシル河流域のオトラルで見つかった銀貨には、アリクボコのタムガではなくバトのタムガが刻印されていた。同じ形状のタムガはモンゴル高原のカラコルムや、クリミア半島のクリムでも見つかっており、13世紀末時点でジョチ朝から元朝に銀が運ばれていた可能性がある。

キーワード
モンゴル、ジョチ朝、元朝、貨幣、タムガ

1．オトラル出土のジョチ朝銀貨

1974年にオトラルで13世紀ごろに作られた銀貨が見つかっている（図1(下)）。最初の報告者のナスティチは製造地と正確な製造年を不明としている[Байпаков и Настич1981:47][1]。画像が不鮮明ではあるものの、ニャマー博士はキセリョフがカラコルムで見つけた230枚の硬貨の中から、オトラルの銀貨と同じタムガと輪が刻印された銀貨[Киселев1965:т.14, No.8]（図1（上））を探し出した。その結果、バイパコフとナスティチがアリクボコのタムガとしていたものが、実はバトの、すなわちジョチ家のタムガであることが分かった[Nyamaa2005:131-133]。

2．モンゴル帝国期のオトラル

オトラルはカザフスタン南部、シル河中流域にある都市遺跡である[Акишев, Байпаков и Ерзакович1972]。チンギスカンの対ホラズムシャー朝戦は1219年のオトラル包囲戦から始まった。また、1405年に東方遠征に向かうティムールが亡くなったのもオトラルであり[川口2014:162-164]、オトラルは東西トルキスタンを結ぶ交通の要衝だった。オトラルはモンゴル軍により徹底的に破壊されたと言われてきたが、少なくともオゴデイが皇帝の時期には硬貨が作られている[堀川2005:104]。

モンゴル帝国時代のオトラルはマーワラーアンナフルを含む中央アジアのオアシス地帯の他の都市と同じく帝国直轄領だった。1260年にクビライが反乱を起こすと、アリクボコは中央アジアの権益を守るためにチャガタイ家の諸王アルグを送り込み、アルグはオアシス地帯に派兵してジョチ家の代官たちを殺し、ジョチ家の権益を奪った。

その後、1269年のいわゆる「タラス会盟」でマーワラーアンナフルはマスウー

1　ナスティチの研究したオトラル出土貨幣の中で最も新しい年をもつものは正確には分からない。また、オトラルではヒジュラ暦666年にジャンドで作られたバトのタムガが刻まれた銀貨も見つかっており[ZENO.RU:174785]、オトラルは西のジョチ朝から貨幣が流入するなど、交易拠点であったと思われる。

ド・ベクらがそのまま統治し、収入の3分の2をチャガタイ家が、3分の1をオゴデイ家とジョチ家が取ることが決まった。現存している貨幣を見ると、マーワラーアンナフルの内、サマルカンドやブハラで作られた硬貨にはオゴデイ家のカイドゥやチャガタイ家の諸王のタムガが刻印されているものがあり、ホラズムではこの2家に加えジョチ家のタムガの入った硬貨もある。ホラズムは1221年にジョチ、チャガタイ、オゴデイの3人が共同作戦で征服した地であり、ジョチ家が収入を得るのは当然だが、オトラルはチャガタイとオゴデイが包囲戦を行った所であり、タラス会盟以降、ジョチ家が権益を主張するのは難しかった。それゆえ、13世紀のオトラルにおいてジョチ家のダルガの監督下で硬貨を発行することはなかったと思われる。

オトラルやカラコルムで見つかった銀貨に刻印されているバトのタムガは「両足」が広がっており、このようなタムガは、図2のようにヒジュラ暦707年にクリム（クリミア半島の現スターリィ・クリム）で作られたジョチ朝（キプチャク・ハン国）第9代当主トクト（在位1291年～1312年）の銀貨に見られる（直径18.5mm、量目1.19g）[Nyamaa2005:199]。したがって、オトラルやカラコルムで見つかったジョチ家のタムガの入った銀貨はクリムで作られた可能性がある。

3．ユーラシアにおける銀の流通

13～14世紀のアフロユーラシア世界では、長距離交易決済手段として銀が使われていた。10世紀以降のイスラーム圏における銀不足、いわゆる「銀の危機」が13世紀後半になると中央アジアでも解消されたのは中国の銀が西方に運ばれたとするブレイク・愛宕説を支持する形で、四日市[2008:121-147]は元朝とイルハン朝との関係の中で東から西への銀の流れについて論じた。

これに対して西から東への銀の流れについては、出土貨幣から明らかにすることができる。カラコルムからジャニベクの銀貨が出土しており[Heidemann2002]、少なくとも1342年以降、ジョチ朝と元朝のあいだで公式の使者や商人などが行き来していたと考えられる。

『元史』には元朝とジョチ朝の関係について、以下の記述がある。

「至元二年，月即別遣使来求分地歳賜，以賑給軍站，京師元無所領府治。三年，中書請置総管府，給正三品印。至大元年，月即別薨，子札尼別嗣[2]。其位下旧賜平陽、晋州、永州分地，歳賦中統鈔二千四百錠，自至元五年己卯歳始給之。」（『元史』、列伝第4、術赤）

1336年に第10代当主ウズベクは元朝に使者を送り分地からの収入を求めたが、大都にジョチ家の総管府（高等弁務官事務所あるいは領事館）はなかったので、1337年に総管府が置かれ、正三品の印が給付された。ジョチ家はもともと山西の平陽、晋州、および湖南の永州に計11万戸余の分地分民を持っていて[村岡1997]、毎年中統鈔建てで2,400錠の税収があり、1339年よりその一部分をジョチ家に給付し始めた。おそらく、ジョチ家の収入の一部が銀塊の形で西に運ばれたのであろう。

また、元朝のアス族（現在のオセット人の祖先）の将官がカトリックの教皇宛書簡を送ったり、教皇からジョチ朝君主宛書簡が届いたりと、キリスト教徒の多いアス族の本拠地を抱えるジョチ朝が、カトリックの東西交流の中継地になっていたと思われる[家入訳1966][赤坂2010:144-174]。

キセリョフがカラコルムで発掘した出土銀貨にバトのタムガが刻まれているとすれば、1336年から公式の使者が往来する以前から、ジョチ朝の銀貨が元朝に運ばれていた可能性があると言える。

2　至大元年（1308年）は間違いで「至正元年（1341年）にウズベクは死去し、子のジャニベクが後を継いだ。」となるが、ウズベクはヒジュラ暦742年（1342年）に亡くなっている[イブン・バットゥータ1999:114]。

図1　（上）キセリョフがカラコルムで発見したジョチ朝銀貨
（下）ナスティチらがオトラルで発見したジョチ朝銀貨
[Nyamaa2005:132]

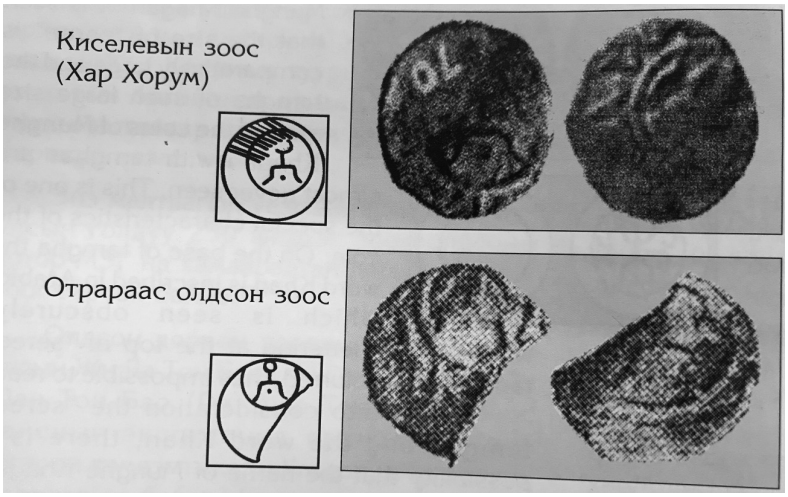

図2　ヒジュラ暦707年（トクト期）にクリミアで作られた、足の広がったバトのタムガが刻印された銀貨（直径18.5mm、量目1.19g）[Nyamaa2005:199]

www.MongolianCoins.com

※本稿は、JPSP科研費16H01953（基盤（A）「前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開」、代表：鶴島博和・熊本大学教授）の研究成果の一部である。また、『元史』の記述の解釈に関して、牛根靖裕氏からご教示いただいた。記して感謝申し上げる。もちろんありうべき誤謬はすべて筆者に帰する。

参考文献

赤坂恒明[2010]「モンゴル帝国期におけるアス人の移動について」、塚田誠之編[2010]『中国国境地域の移動と交流:近現代中国の南と北』、人間文化叢書、ユーラシアと日本:交流と表象、有志舎。
家入敏光訳[1966]『東洋旅行記』、東西交渉旅行記全集II、桃源社。
イブン・バットゥータ（イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注）[1999]『大旅行記4』、東洋文庫659、平凡社。
川口琢司[2014]『ティムール帝国』、講談社選書メチエ570。
堀川徹[2005]「オトラル」、小松久男他編集[2005]『中央ユーラシアを知る事典』、平凡社、104。
村岡倫[1997]「元代江南投下領とモンゴリアの遊牧集団」『龍谷紀要』、18（2）。
四日市康博編著[2008]『モノから見た海域アジア史:モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流』、九大アジア叢書11、九州大学出版会。
Heidemann, S.[2002]Coin pendant from Central Asia, Roth, Helmut R. and Ulambajar Erdenedat(ed.)[2002] Qara Qorum-City (Mongolia) I, Prelimirary report of the excavations 2000-2001, Bonn Contributions to Asian Archaeology, Vol.1, 2002(Institute of Pre- and Early Historical Archaeology, Bonn University).
Nyamaa, B.[2005]The Coins of Mongol Empire and Clan Tamgha of Khans(XIII-XIV), Ulaanbaatar, Mongolia.
Акишев, К.А., Байпаков К. М., Ерзакович, Л.Б.[1972]Древний Отрар, НАУКА, Казахской ССР.
Байпаков К. М., Настич В. Н.[1981]Клад серебряных вещей и монет XIII в. из Отрара, Казахстан в эпоху феодализма. Алма-Ата.
Киселев, С.В.[1965]Древнемонгольские города, М.